The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近世における絵合の展開
Author(s)	Bednarczyk, Adam
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58302
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【3】

氏　　名	Ádam BEDNARCZYK（アダム ベドゥナルチク）
博士の専攻分野の名称	博　士（日本語・日本文化）
学　位　記　番　号	第　２４２３４　号
学位授与年月日	平成 22 年 9 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語社会専攻
学　位　論　文　名	**近世における絵合の展開**
論文審査委員	（主査） 日本語日本文化教育センター教授　奥西　峻介 （副査） 日本語日本文化教育センター教授　加藤　　均 日本語日本文化教育センター准教授　柴田　芳成 日本語日本文化教育センター教授　山蔭　昭子 日本語日本文化教育センター准教授　蔦　　清行

論文内容の要旨

本研究は、江戸時代の文化において、平安朝の貴族社会の間で生み出された絵合を喚起する遊び・会および絵を合わせる競技の多面的な展開を明確にすることを主たる目的とする。本論文で筆者は、近世における絵合がいくつかの理由で自らの風体などを変化し、また絵合の意味は多義化したと論ずる。これを示すためには、当時に行われた遊芸などに関する記録以外、雑多な文芸作品の記述を基礎資料として取り上げることにした。それに基づき、現実的な世間および文学的な虚構という二つの観点から見られる絵合の展開を解明することを目指した。

本論文を構成する各章の概要は以下のとおりである。

序論においては、本研究の対象とする絵合の定義を説明すること及び絵合についての先行研究を紹介することから始めた。その次に、研究の目的、アプローチなどを詳述し、本論の視点を示した。

第１章では、平安時代から室町時代に至るまで、公家や武家が開催していた絵合のイメージを中心として論じた。絵合の発端となる『源氏物語』の絵合巻に描かれた催物を別として、平安中期頃に行なわれた絵合を見れば、これらの大半は当時の様々な物合と同様に歌合と結び付いたものである。また、絵巻物の流行がはじまった平安末期頃から、絵合は趣向を凝らし、多くの御所の豪華な遊戯となった。源実朝や足利義満などが開いた絵合には、評価の高かった絵巻が陳列された。この傾向は、例えば後堀河院と藻璧門院の催しのような大規模のイベントとして行なわれた絵合の場合にも特に明らかである。さらに、このような絵合のイメージを手掛かりとして、近世文献において、当時の知識人は昔の絵合についてどのように論じたかを示した。それらの文献を見れば、絵合の名称しか挙げないものにせよ、それぞれの絵合の内容に言及するものにせよ、それらの大半は絵合をきわめて概括的に扱い、不正確なものも少なくないことを明らかにした。

第２章では、大小会と絵納札の交換会という二つの問題点を取り上げた。最初は、大小暦とこれらの東錦絵の創造における重要性に焦点を当て、大小の交換会を詳細に述べた。その大小会が成立したことは、連の活躍に関わっている。本来、大小会はこうした活躍の一種として生まれ、大小暦の制作に関する集会であった。しかし、摺物の技術の発達につれて、大小の「錦絵化」も進んでいった。その絵画化された暦は、交換会に際して大小の優劣を競った「弄び草」となった。また、明和初年の「絵合」の流行を論じながら錦絵の商品化や大衆化は、大小会の衰退にどのような影響を与えたかにも触れた。その次に、江戸末期の納札を中心とし、それらの娯楽化について述べ、そして絵札の交換会に見られる絵合の競技を扱った。大小暦と同様に、納札は本来、玩弄物という役割を果たさなかった。しかし、化政期に初めて連札の交換会が行なわれた以降、黒白の物であった連札の大部分に錦絵の技巧が採用され、美しい色の図案意匠を凝らした絵納札の制作が始まった。納札の「錦絵化」とそれらの画題の多様化によって、絵札がすぐに優劣を争わせる集会を中心となり、流行した。本章では、筆者が大小暦または納札の元来の実用的な機能変遷によって生じた集会の「絵合化」というプロセスを示した。このプロセスの主たる要素としては、大小暦と納札が鑑賞物や玩弄物となったことに影響した錦絵による絵画化を特に強調した。

第３章において問題にしたのは、雑俳諧と絵合の間の関係である。十七世紀後期以来に発達した俳諧の形式を見れば、その背景での俳諧と絵合との関連は、複雑な問題であるが、当時の絵合の展開の一面を明らかにするために重要な事柄である。このような視点から、絵合の性質は場合によって異なっているが、それらの大半における絵合は、絵を合わせる遊び事のわざをもって行なわれた言葉遊びと結び付いた物として流行った。独特の遊ぶ技巧として絵合の使用については、まず、森川許六の『風俗文選』の「画楼絵合ノ序」を中心として論じた。許六の記述に描かれた絵合は、競技より技巧として機能していた。この文脈では、絵合は、遊戯性を持ったはずであるが、ここではそれの教養的な機能が重要であった。絵を合わせるわざは、この場合、「詩画一致」という思想の実践方法の一つとして用いられたと考えられる。しかも、雑俳と結合した遊び事の技巧と見なされて絵合が使用される傾向は、近世後半において多様な形式に反映されている。当時に制作された滑稽な、また謎々の絵に合わせて句を作るという形式を持った遊びが盛んに行なわれた。また、咄の会が出現した後、絵の内容を見ながらこれについて咄を話すという絵合は、それぞれの場合に絵合と呼ばれる言葉が用いられるが、それは、明白に言えば、別の遊び事に際して使用される絵合の技巧に言及しているのである。したがって、本章の中では、大小会や納札の交換会の場合に示したように伝統的な絵合に倣った娯楽の集会が行なわれていたが、近世において絵合を遊び事そのものより他の遊びなどにも使用できる技巧として扱う傾向は強かったと論じた。

第４章では、絵を合わせるという遊び事の技巧と見なされる絵合、また絵合の競技について述べた。中世に高貴な御所で開催された絵合に対して、近世における絵を合わせる遊び事は益々大衆化した。その頃、伝統的な絵合の決まった様式が失われたにもかかわらず、絵の製作・鑑賞・優劣を中心とした様々な集まりは、依然として行なわれていた。常人の住宅で開催される画会あるいは興画合を見ると、それはかなり排他的な集会で、仲間内で開かれた催物であった。本章の中で扱われた書画会も、本来は排他的でサロン性という特質を持っていたが、早い時期に公開のイベントになった。書画会の商業化のため、最初見られた絵合のようなサロン的な雰囲気はなくなった。それぞれの集会は、行い方などの点で異なるが、絵の優劣を判定することは明らかな共通点である。近世における絵合がどのように展開したかは、また『後見草』所収の記述に従って示すことができる。杉田が記録したイベントの場合、絵合に際して競われたのは、絵の内容や文学作品に出てくる場面を視覚化した陳列物であった。こうした絵合の経緯を見れば、それらの参加者達は自らの連想によってその珍しい「絵」を遊んでいたことが特徴であるが、一方、滑稽が流行った当時におけるこの絵合も実際には絵合をパロディー化したものであると考えられる。なお、近世において、絵合は多面的に認識していたことをもっと具体的に示すため、カルタの絵合についても述べた。カルタの競技を考えてみれば、絵の優劣を競い合わせることではなく、絵を組み合わせることであった。カルタの絵合は平安後期に遡る貝覆いの競技を借り、南蛮風のカードを採用した絵入りカルタをもって遊ばれたが、その名称は絵の合せる技巧に従って造り出された。また、カルタの絵合と同様に、絵合の技法に従って絵合と称された様々な言葉遊びも、このような傾向を示すと考えられる。

第５章では、近世文献や文芸に出てくる絵合というモチーフ、またこの絵合のイメージを論じた。文芸

における絵合の記述は、作品の歴史的な文脈によって、二つに大別できる。『衣更着物語』に描かれた扇絵合、または『浮世又平誉助劍』の序幕「広書院古画合の場」を瞥見すれば、すべては絵巻が繁盛した足利将軍家などの時代に開催された絵合に言及している。しかし、ここで触れた「広書院古画合の場」における絵合のイメージは、それが物合様式に則って行なわれたイベントではなく、普通の絵の鑑賞やそれらの優劣を決めた催しである。また、絵合という主題は、近世の社会的・文化的な現実を背景として扱われている。西沢一風の『今源氏空船』に描かれた「恋の絵あはせ」は、『源氏物語』との連想によって、優雅な催物を示唆するが、実際に合せられたのは絵のように精巧で多彩な染物などの模様であった。西沢は、昔の遊びである絵合の耽美を用い、当時の男女の間の関係に関わるあそびを叙述した。さらに、第５章で述べた里謡の一例の場合には、「源氏物語巻名尽くし」と称した「物尽くし」などによる『源氏物語』への言及が明らかであるが、それもある程度当時の判じ団扇絵を用いて行なわれたイベントに関係があるだろう。これと同様に落し噺や柳多留などに現れる絵合のモチーフは、近世において展開していた絵合の多面性と多義性を示していることを明らかにした。

最後に結論では、以上のまとめから、近世における絵合はどのように展開していたかと推論した。資料の分析から、近世では絵合が遊芸の一つとして行なわれていたが、典型的な様式の絵合は、衰退していった傾向が観察できる。また、「詩画一致」という思想の影響、および貝覆いの競技に根付く遊び方を採用したことなどによって、絵合という言葉は、多義化して様々な遊びや会などに対してさらに用いられたのである。さらに、近世人にとって、絵を合わせるという遊び方または競技は、絵合の伝統的な意味だけに限定されなかったと考えられる。近世初期から流行しはじまった新たな「あわせ」という技法の大衆化は、当時の人々が典型的な遊芸や娯楽の形式を理解することに影響を及ぼしたと考えられる。そして、近世における絵合の展開を充分に把握するためには、その頃、俳諧と画との関係、また絵の「あわせ」という競技の多様化などを考慮に入れなければならないということを論証した。

論文審査の結果の要旨

提出された論文『近世における絵合の展開』は、中古にあった遊技「絵合」が、近世の同類の遊技にどのように影響を与えたか、また、近世における遊技の大衆化の一端を解明しようとする極めて意欲的論文である。同時に、資料とした古典書は約９０点、参照文献は約１５０点、総字数１５万字を越える労作である。

論文は、概ね、二つの部分からなっている。第一は、平安時代から室町時代にかけて行われた「絵合」の実体の解明である。この点については、先行研究を批判的に分析するとともに、『源氏物語』、『長秋記』、『源平盛衰記』、『古今著聞集』、『明月記』、『更級日記』、『民経記』、『太平記』、『吾妻鏡』、『看聞御記』、『満済准后日記』等一次資料にも当たって裏付けを取り、いわゆる「絵合」の有り様を記述している。

第二は、中古の「絵合」が近世の遊技にどのように伝えられたかの分析である。まず、本来、「絵合」は、絵を持ち寄って、その優劣を競う遊技であったが、絵画（絵巻物）に代わって、大小暦や納札を持ち寄り、単にその優劣を競うことから、交換の会へと変化して行った点を明らかにしている。そこには、肉筆の絵画から印刷物への制作方法の変化による唯一性の喪失があったことの指摘もある。さらに、俳諧と結びつくことによって、対象の優劣よりも、持ち寄った作品の照応の妙に感興を覚える方向へ、また謎など言葉遊びへと変化していった。一方、絵画の優劣を競う側面は、江戸末期に流行した興画会に受け継がれ、その優劣が、景品の獲得という競技に発達していったとし、絵合カルタをその一例と見なしている。以上の事柄を太田南畝『金曽木』、黒川道祐『雍州府志』などいわゆる随筆、日記、地誌を初めとする記録文学を資料として論述した。さらに、西沢一風『今源氏空船』等の浮世草子、俚謡『伊勢音頭二見真砂』を初めとした江戸期の文芸を資料にして、近世の人々が「絵合」に対して抱いていた心像を明らかにしようとした。

従来、近世の遊技について、中古の「絵合」の影響ならびに文化伝承を論じたものは皆無である。人間の文化が歴史的存在であることは自明であるから、近世の遊技についても、過去からの伝承性ないし継続性が期待されて当然であるが、今までそれが等閑視されてきたのである。そういう意味で、本論は日本遊技史の空白を埋めるものと評価できる。

その課題は厖大の一言に尽き、遺漏や論究の不足を感じさせる所もある。また、日本語が筆者にとって外国語であるため、論述には母語の干渉による不明晰な点がなくはない。しかしながら、そのような難点の存在にも拘わらず、課題の独創性および学術的価値を認知し、それなりの完成度を考慮すれば、総合的にきわめて優れた論文で、博士号を授与するに足ると評価できる。